三重県立看護大学紀要，　特別号，　1～9，　2021

〔報　告〕

ICTを活用した大学英語教育の試み

－コロナ禍における新たな学びのあり方－

林　姿穂[1)]

【要　旨】

本稿では、2020年度のコロナ禍における教育環境の変化を背景に、大学英語教育の授業実践における試みについて報告する。この報告で取り上げるクラスは三重県立看護大学の１年生を対象とした「英語講読」の授業である。この授業は週１回のペースで、通年で行われ、日本人の英語教員が担当する。この実践報告を通して明らかにする点は次の三点である。一点目に、ICTの活用は、受講者の家庭学習の時間を増やすことに効果的であること、二点目は、教員が、受講者の英語のレベル差にとらわれることなく課題設定ができるということである。三点目は、ICTをフル活用した2020年度の「英語講読」の受講者の授業満足度が、ICTを積極的に活用しなかった過去の年度の同科目の受講者の授業満足度よりも高かったという点である。本稿では、看護大学の英語教育におけるICTの導入が効果的であり、今後も英語の授業でICTの活用を継続することが好ましいことを示す。

【キーワード】新型コロナウイルス　ICT　EnglishCentral　Microsoft Teams　eラーニング

Ⅰ．はじめに

2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、多くの教育現場ではオンライン授業が導入され、eラーニングも積極的に取り入れられた。1990年頃のIT革命、および、近年のICT（Information Communication Technology）革命以降、大学、短大などの高等教育機関においては、全学で商用LMS（Language Management System）[注1)]のWebClassやMoodleを導入するなど、教育環境が整備されつつあったが[1)]、各教育現場が、LMS導入を最も強く認識したのは2020年度だったと言っても過言でない。

eラーニングの導入により、学習者側は同一時間・場所に集合する必要がなくなり、各自が好きな時間に学習ができるようになったが、学習者自身による学習意欲の維持が難しいこと、学習中に生じた疑問が即時に解決しないこと、教員やその他の学習者との交流を深められないことが欠点として挙げられてきた[2)]。これまでは、eラーニングを授業で導入するにあたって、学習者の自律的な学習を促すべく、対面授業時に、教員と学習者のやり取りを取り入れ、eラーニングの欠点を補うことが好ましいと考えられてきた[2)]。2020年度のコロナ禍においても、このような欠点が完全に補われたわけではなかったが、教育現場では、積極的にeラーニングが取り入れられた。緊急事態宣言が発令され、大学に通学することができない期間、多くの大学生は自宅学習をすることを余儀なくされ、教員側も急なシラバスの変更やオンライン授業用の教材作成に追われた。三重県立看護大学においても状況は同じであり、英語科目の履修者は、Eメールでの教員の指示内容や、教員の作成したマニュアルや動画の説明に従いながら、自宅でeラーニングシステムに登録し、その課題に取り組むことになった。

本稿では、コロナ禍における教育環境の変化を背景に、三重県立看護大学の英語科目で、どのような授業実践を試みたかを報告する。具体的には、2020年度入学した大学1年生の必須英語科目の「英語講読I」（前

1) Shiho HAYASHI：三重県立看護大学

期開講)、「英語講読II」(後期開講)の授業実践を取り上げ、eラーニングシステムおよびMicrosoft Teams(以降、Teamsと記す)を活用した授業方法や、その効果、および今後の課題と展望を述べていく。

Ⅱ. 三重県立看護大学の英語の授業におけるeラーニングシステムの導入とその背景

三重県立看護大学においては、2019年度後期から、部分的に、1年生の必須科目の「英語講読II」の授業で、eラーニングシステムを使っての自宅学習を促してきた。この科目は一般的な英文記事等の長文読解および看護学に関する英語の文献の読解、看護英語の習得に重点を置くものである。

教育機関で、eラーニングシステムを導入するにあたり、一般的にはそのサービスを提供する業者と契約を結ぶため、高額の予算が必要となる。しかし、多くの予算をeラーニング導入のために費やしたにもかかわらず、受講者がそのシステムをあまり活用しないという失敗例も多い。そこで、三重県立看護大学では、2019年度に『EnglishCentral』というeラーニングシステムを一定期間(大学の授業期間の半期分程度)利用できるライセンスの付いた英語教科書(成美堂出版)[注2)]を試験的に使用し、このシステムが受講者とって使いやすいものであるかどうかを確認することにした。

この教科書を受講者が購入することでeラーニングシステムへのアクセス権が個々の受講者に付与される。受講者はアクセス権の有効期限内はPCとスマートフォンの両方を使って、いつでもどこでも学習を進めることができ、その到達度も受講者自身が端末で随時確認することができる。このeラーニングシステムでは、ニュース英語、留学準備講座、TOEIC対策、医療英語、有名人のスピーチなど、14,000本以上のweb動画の視聴が可能になるだけでなく、動画を視聴した後も、その中で使われていた単語のタイピング練習や、文章のスピーキング練習ができる。また、サイト独自の音声認識機能によって個々の受講者の発音が診断評価され、即時に受講者は診断結果を確認することができる。

しかし、これだけの便利な機能があるにもかかわらず、導入初年度の2019年度の後期の時点で、積極的にeラーニングを自宅で行った受講者は、ごくわずかであった。2019年度は、対面での授業が原則であり、クラスサイズも50人程度であったために、毎回授業内で行う小テスト、授業出席、提出物および定期試験(ペーパーテスト)の結果が主な評価材料となっていたことも、eラーニングシステムの利用率が低かった原因の一つである。また教員側も対面授業の内容を充実させることに重点を置いていたために、eラーニングは授業の残り時間や自宅で行う補足的なものと位置づけ、その学習の達成度は、加点評価の一部として適宜加算する程度であった[注3)]。さらに、1年生の受講者は、例年、英語科目より、看護の専門科目に興味を示す傾向にある。そのため、eラーニングシステムを使っての任意の課題(教員が設定したもの)を全てやりこなした受講者は全体の10パーセントにも満たなかった。一部の学習意欲の高い受講者のみが、eラーニングシステムを積極的に使って学習した程度であり、英語に苦手意識を感じていたり、英語のペーパーテストの点数が低い受講者の使用率は極端に低かった。また、eラーニングシステムの導入により、受講者全体の家庭学習の時間が著しく増えたわけでもなかった。

こういった状況を鑑みて、2020年度以降は『EnglishCentral』のライセンスが付いていない教科書を使用することに決め、eラーニングシステムの本格的な導入は取りやめる予定であった。しかし、2020年度には、コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、前期開始当初から、対面授業が実施できなくなり、授業方法を変更せざるをえない状況におかれた。eラーニングの導入を断念した矢先の出来事であったが、幸いなことに、『EnglishCentral』の運営者側は、そのサービスを全教育機関に2020年度4月から一定期間、無料で提供することを発表した。三重県立看護大学で2020年度に使用予定であったテキストは、『EnglishCentral』のアクセス権がついていない、別の出版社のものであったが、学習サイトへのアクセス権が付与された教科書を購入したかどうかに関わらず、運営者側が全教育機関にeラーニングシステムの無料提供を決定したので、2020年度は前期・後期とも、通年でこのサービスを利用することにした。

Ⅲ. 授業の計画の変更と受講者への周知方法

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、4月6日から5月5日までの間、本学の学生全員は自宅学習をす

ることになった。そこで教員は、急遽、受講者に『EnglishCentral』の登録方法と学習の進め方をEメールで伝えた。受講者は『EnglishCentral』の学習を各自で進めると同時に、Teamsで、各週の達成目標や、教員が独自で作成した教科書の内容の解説動画のリンクを確認し、その動画を視聴しながら自宅で学習を進めることになった。

Ⅳ. 2020年度「英語講読Ⅰ」、「英語講読Ⅱ」の授業の概要

１．対象者

三重県立看護大学の英語必須科目である「英語講読I」、「英語講読II」の受講者約100名（同科目の再履修者を含む。）

２．授業科目の概要

三重県立看護大学で2020年度に開講された、１年生の英語必須科目のオンライン授業（「英語講読I」（前期）、「英語講読II」（後期））を対象科目とする。受講者は、2020年度の1年生および、過年度生で再履修者を含む。対象科目の授業は全面的にオンライン（オンデマンド形式）で行った。

３．授業方法

前期15回、後期15回の授業を、Teamsと『EnglishCentral』の併用で全面的にオンライン（オンデマンド形式）で行った。前期（英語講読I）は、総合英語の教材である『A Taste of English: Food and Fiction（フィクションにみる食文化）』（朝日出版社）を使用した。後期（英語講読II）は、看護英語の教材である『English for Health and Medicine（ビデオリポート：健康等医療）』（朝日出版社）を使用した。対面時の授業時間が90分であるため、Teams で指示する課題内容も90分程度で完了するものにした。

Teamsでは、前期は、教員が、図１、図２のようなチャネルを授業ごとに作成し、１週間に１つのChapterを学習するよう受講者に指示した。受講者は、週1回1つのチャネルを閲覧し、そのチャネルに記されている課題を完成させるとともに、同チャネルに貼りつけられているリンクから教員が作成した授業動画を視聴することになっていた。基本的に、受講者が大学に登校できない期間はEメールですべての指示を与え、Eメールのみで個別に質問を受け付けたが、登校が可能な期間は、受講者の希望に応じて随時対面で個別指導を行った。

図１に表示されている、『A Taste of English』は前期の使用教材である教科書のタイトルである。受講者は、授業の第１週目で、「A Taste of English Chapter 1の解説」と書かれている部分をクリックし、図２に示すように、教員が作成した授業動画のリンクを確認し、それを視聴した。翌週は、「A Taste of English Chapter 2 の解説」を閲覧することになっており、その後も、同様に、週に１つのチャネルを見るというペースで、順に閲覧し、自分で学習のペース

図１　「英語講読Ⅰ」のTeamsのチャネル一覧

づくりをした。

チャネルの文字をクリックすると授業動画のリンクが確認できる。その動画は、主に、構文の理解を促すことを目的とし、文法や語彙の説明を含め、毎回20分程度になるよう作成した。第7週目が終わった段階で、第1週目から第7週目までの学習内容に関する復

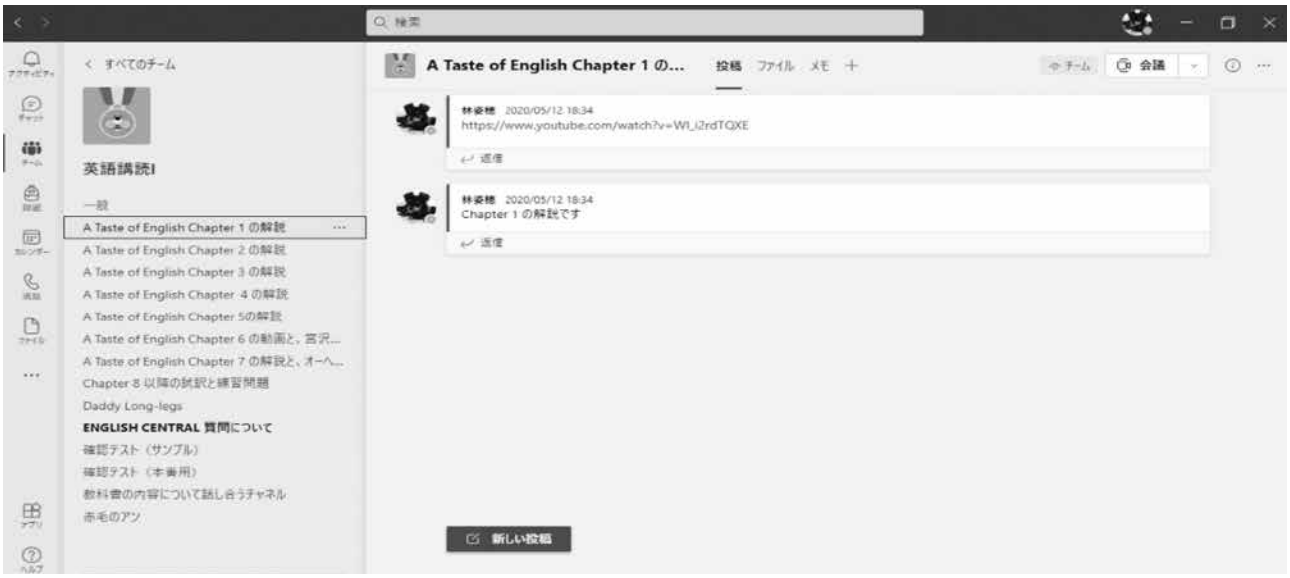

図２　Teamsに表示される動画リンク（前期）

習課題を出した。課題内容は一問一答形式とし、教科書を見ながら空所補充をし、Googleフォームで受講者が解答を期日までに送信するものである。学期末にも第8週目から第15週目までの復習課題を出し、同様にGoogleフォームで解答を送信するよう指示した。そして、2回の復習課題の総合点を評価に反映した。

後期の学習内容は図3の通りである。図3は後期に開講された「英語講読II」のチャネルの画面であり、前期の「英語講読I」と同様に、各週に学習するUnitと、学習期間の目安（いつからいつまでに何を学習するか）が示されている。前期の「英語講読I」では、学習期間の目安を示さなかったため、受講者から、いつまでに何をすべきかが不明確で、ペースづくりが難しいという声が上がった。そのため、後期の「英語講読II」では、日付を各チャネルの横に記すことにした。また、教科書の音声ファイルや、解答もアップロードし、毎週、復習課題（図４の「確認テスト」が復習課題にあたる）をUnitごとに課し、Google フォームで提出させた。課題提出をしたかどうかは評価に反映せず、代わりとして、課題内容とほぼ同じ内容のテストを数回、オンラインで実施した。図３の「期末テスト30点分」はそのうちの一つであるが、受講者は教科書を見ながら受験することとした。教員は、期末テストの受験の最終期限を受講者に知らせ、期限の間際には、複数回リマンドメールも送信した。

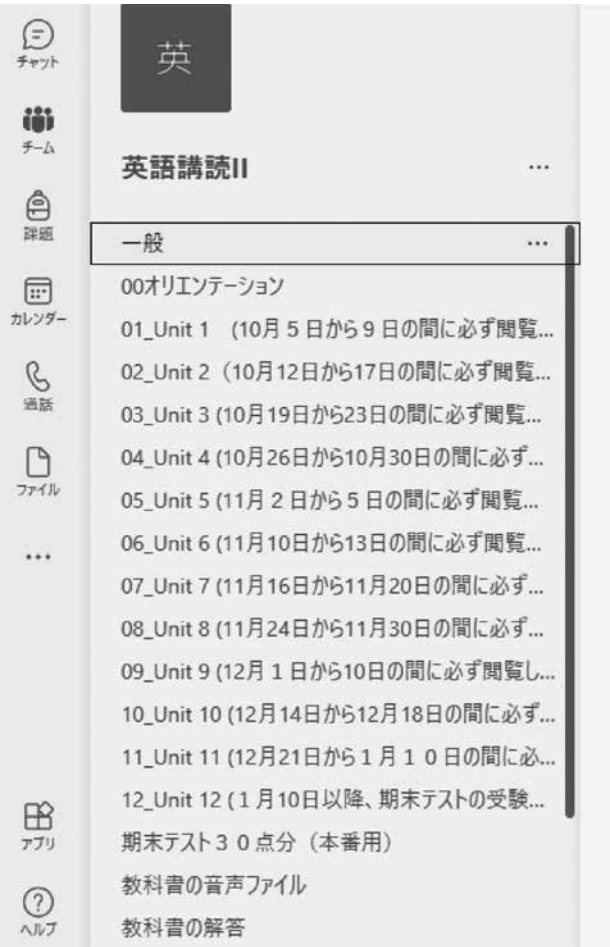

図３　「英語講読Ⅱ」のTeamsのチャネル一覧

図４　Teamsに表示される動画リンク（後期）

「英語講読I」、「英語講読II」の各週の授業時間の配分（1つのチャネルで指示する課題内容）は、教員が独自に作成した授業動画の視聴（20分程度）、教科書の練習問題の解答と答え合わせ、（10分程度）とした。対面時の授業時間が90分であるため、教科書の内容を消化するだけでは、物足りなくなってしまうので、『EnglishCentral』を使う60分程度の学習課題を課した。

『EnglishCentral』の学習内容は、主に5つの動画を視聴し、訳を確認することや、ディクテーション形式で、50個の単語のタイピング練習を行うことである。この課題は必ずしも一度に5動画を視聴し、60分間続けて学習するものではなく、例えば5回に分けて、10～15分ずつ行ってもよいことになっている。受講者はPCはもちろんのこと、スマートフォンから学習することも可能であり、その学習の進捗状況はPC、スマートフォンの両方で自己確認することができる。教員も同様に、PC、スマートフォンからすべての受講者の学習の進捗状況を確認することができる。『EnglishCentral』での学習の進捗状況が思わしくない受講者には、個別にEメールで連絡を取って学習を促した。

教科書の内容や『EnglishCentral』の動画で使われている英語に関する質問は、Teamsのチャット機能を使って受け付け、質問内容と教員からの回答は、随時、受講者全員と共有した。

４．授業用資料について

資料は主に3種類作成した。1つ目はオリエンテーションの動画の内容を文書化したワードファイルである。2つ目は授業動画の内容を簡潔にまとめた資料であり、それを適宜、Teamsの各チャネルのファイルに格納した。3つ目は、教科書本文（英文）の日本語訳や、教科書本文を読み上げた音声データとそのスクリプトであり、出版社の承諾を得て、Teams にアップロードした。

５．教員による授業動画の作成方法

教員は独自に毎回の授業動画を作成した。教員は、1つの動画に対して、図５のようなスライドをPower Pointで20枚程度作成し、音声録音機能を使ってレコーディングをした。１スライドあたりの音声は１分程度になるように工夫し、教科書の内容の解説をすると同時に、所々で音読の練習方法を説明した。

作成した音声入りのスライドは、MP4のファイル形式に変換し、YouTubeにアップロードして限定公開した。また、教員は、授業開始前の期間（前期は、オンライン授業に切り替えられる前の数日間、後期分は夏季休暇期間）を利用して、全15回分の授業動画のリンクを作成し、チャネルに貼り付ける作業を行った。

後期は、教科書の内容に関連する英語のDVD（字幕付き）が出版社から提供されていた。医療技術や患者へのインタビュー、薬の効能などが主な内容であっ

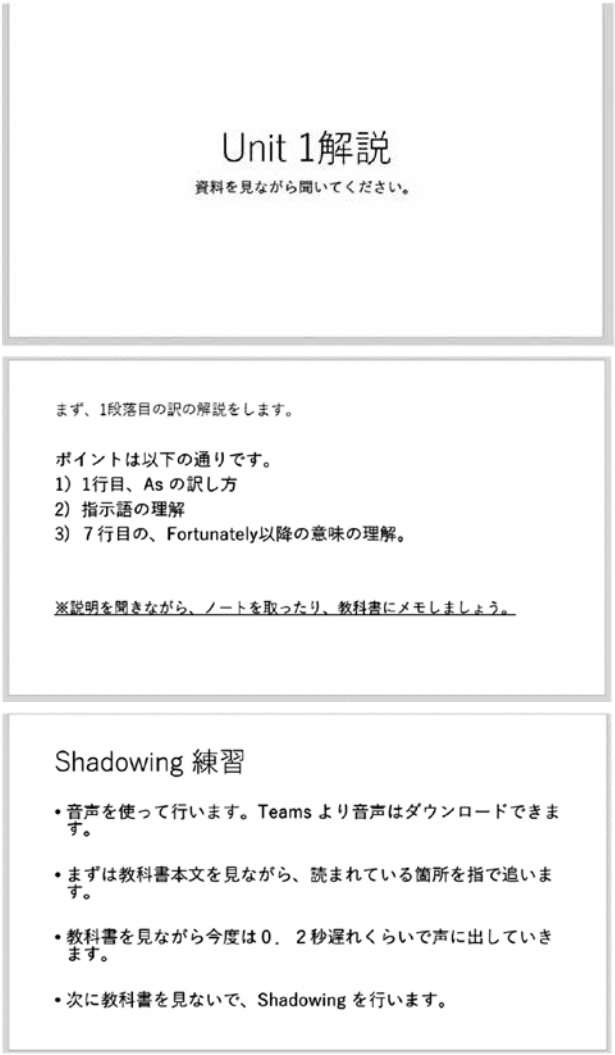

図５　前期『A Taste of English: Food And Fiction（フィクションにみる食文化）』（朝日出版社）Chapter 1の解説動画の一部

た。受講者にそのDVDを視聴させる必要があると感じたので、出版社の承諾を得て、Microsoft Streamを使って動画リンクを作成した。このことにより受講者は視聴したいときに何度でも動画を視聴し、字幕を活用しながら意味や発音を確認することができた。

６．出欠確認方法

単位取得のためには、出席回数が授業実施回数の3分の2を超えていなければならない。しかし、オンデマンド形式のオンライン授業では、出欠の確認が取りにくい。そこで、『EnglishCentral』の教師用のツールを活用し、週ごとに学習の進捗状況を見て出欠を確認した。教員は、まず、『EnglishCentral』の教師用アカウントでログインし、大学名とクラス名の登録を行った。その後、学習目標の設定を行った。「英語講読I」（前期）の学習目標は1週間あたり5動画視聴と50単語のディクテーションによるタイピング練習とした。「英語講読II」（後期）の学習目標は1週間あたり5動画の視聴のみとし、タイピング練習は任意とした。

その後、教員は、『EnglishCentral』の教師用画面から、各科目（クラスに固有）のリンクを作成し、受講者が各自そのリンクから本名で受講登録を行うよう指示した。受講者の登録が完了すると、教員は図６のような画面から受講者の学習の進捗状況を確認することができる。図６は「EnglishCentral の利用法教師編」のサイトからの引用で、教師用画面である。教員は、授業期間中の毎週月曜日の午前8時59分に学習の進捗状況を確認し、その時点で前の週の学習目標が達成できているかどうかで出欠確認をした。また、その時間に出欠確認が行われている旨を、予め、受講者にも伝え、学習が完了しているかどうか自己確認するよう促した。図６の「ゴール＝100」に達していれば、前の週の授業は出席したものと見なした。達成度が50パーセント以下の週が2回以上続いた時点で、該当する受講者にEメールで連絡し学習を促した。各学期の終了日時までに65パーセント以上の達成率になっていれば、授業実施回数の3分の2以上出席したものとみなし、評価の対象とした。しかし、達成率が基準に満たない者は、課題をすべて提出したとしても評価の対象から外れる旨を予め伝えた。

７．授業期間中の教員の役割

教員の役割は、主に受講者の質問への回答、『EnglishCentral』の操作方法の個別説明（主にEメールにて）、オンラインテストの期限のリマインド、テスト受験後のフィードバック等であった。『EnglishCentral』の進捗状況も定期的に確認した。

進捗状況の確認は図６の画面から定期的に行った。また、受講者の要望があれば、対面で個別に教科書の内容説明や、オンラインテストのテスト後の解説、PCの操作方法の説明なども適宜行った。

https://solutions.englishcentral.com/ja/2019/03/12/teacherusage/

図６　『EnglishCentral』の学習記録の管理（サンプル）

８．評価方法

「英語講読Ⅰ」に関しては、『EnglishCentral』のクラス目標の達成率が評価の80パーセント分を占めるようにした。Googleフォームによる一問一答の課題（教科書の内容理解）を評価の20パーセント分とした。『EnglishCentral』の達成率（1パーセントで1点とカウントする）とGoogleフォームの課題の点数（20点満点）の合計で60点以上を取得していれば合格とした。

一方、「英語講読Ⅱ」に関しては、オンラインテスト（Googleフォームによる）を3回実施し、テストの点数が全体評価の80パーセント分（80点分）を占めるようにした。『EnglishCentral』のクラス目標の達成率は、評価の20パーセント分（1パーセントで1点とカウントする）を占めるようにした。後期の「英語講読Ⅱ」も前期の「英語講読Ⅰ」と同じく合計で100点満点中60点以上を取得していれば合格とした。

Ⅴ．受講者の反応

三重県立看護大学のFD委員会では、毎年、前期、後期の最終授業で「学生による授業評価」のアンケート調査を実施しており、その結果を教員に通知し、授業の改善に努めている。このアンケート調査のそれぞれの質問項目に対し、度数1から４で回答を求め、「4＝そう思う」、「3＝ややそう思う」、「2＝あまりそう思わない」、「1＝全くそう思わないの」いずれかの項目に受講者がオンラインで回答することになっている。このアンケート調査の回答率はいずれも7割を超えていた。

2019年度の「英語講読Ⅱ」の授業全体が満足いくものであったかどうかという質問項目に対する回答は、3.35であった。一方、2020年度の授業全体の満足度は、「英語講読Ⅰ」は3.54、「英語講読Ⅱ」は、3.43であった。このことから、全面的な対面授業をするかどうかや、eラーニングを対面授業の中でも取り入れるかどうかが、直接授業満足度に影響するものではないことがわかった。全面的な対面授業よりも、全面的なオンデマンド形式のオンライン授業を行った方が、満足度が上がることもわかった。受講者は全員看護学部の学生であり、一年生は例年、専門科目の課題や学習に追われることが多い。英語に関心を示す受講者の数が、他大学と比べると極端に少ない。よって、全面的なオンデマンド形式のオンライン授業とeラーニングの併用によって受講者に時間的な拘束がなくなったことが満足度に反映されたと考えられる。

一方、同アンケート調査の授業の難易度を尋ねる項目においては、「この授業の難易度は適切だった」という問いに対し、満足度と同様に１から４の度数で回

答を求め、「4＝そう思う」、「3＝ややそう思う」、「2＝あまりそう思わない」、「1＝全くそう思わないの」いずれかに受講者がマークすることになっていた。全面的な対面授業であった2019年度の後期の「英語講読II」については、その点数が特に低く、2.19であった。2019年度後期は、部分的なeラーニングの導入によって、自分の英語レベルに合った教材を選択することができたので、難易度を各自で調整できたにもかかわらず、難易度が適切でないと感じた受講者が多かった。おそらく、教科書の内容や、対面で行った教科書の解説の難易度およびペーパーテストの難易度が受講者の英語のレベルに合っていなかったと想定される。全面的にオンライン授業を行った、2020年度の「英語講読I」の同じ項目では、3.55、「英語講読II」では3.57に上昇した。eラーニングシステムの積極的な導入によって、受講者は自分のレベルにあった動画を選択し、その動画に基づくディクテーションや練習問題に取り組むことができたので、難易度に関する不満が解消されたものと考えられる。また教員は、教科書の内容を中心とした解説は最小限にとどめ、ペーパーテストは実施しなかった。そのため多くの受講者は難易度が自分にとって適切だと感じたのであろう。

毎週の、授業外の学習時間（課題を含む）については、緊急事態宣言が発令されていた、2020年度の前期の期間中に増えていたこともわかった。授業外の学習時間についても、度数1から4で回答を求め、「4＝2時間以上」、「3＝1時間程度」、「2＝30分程度」、「1＝ほとんどなし」いずれかの項目に受講者はマークすることになっていた。2019年度の「英語講読II」では、1.81 であったのに対し、2020年度前期の「英語講読I」では、2.21に上昇した。2020年度の「英語講読II」では1.82にまで下がった。「英語講読II」では、受講者の負担を軽減するために、eラーニングシステムを使ってのタイピング練習は任意とし、代わりに、教員側が準備した、医療関連の英語のDVDの視聴を課題としたので、eラーニングシステムを使う機会が減ったためだと考えられる。それゆえ、授業外の学習時間を受講者に確保させるためには、できるだけ、eラーニングの課題を出し、その進捗状況で評価することが好ましい。

Ⅵ. 課題と今後の展望

この授業科目の到達目標は、長文読解の力をつけること、異文化への理解を深めること、看護英語に慣れ親しむことである。一見、リスニング、ライティング、およびスピーキングのスキルは重視されておらず、eラーニングを活用することの必然性はないように見える。しかし、昨今の英語教育においては、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの4技能をバランスよく伸ばすことに重点が置かれるため、『EnglishCentral』の導入は有効であったと考える。このことで、リーディング指導に特化しつつも、他の3技能を伸ばすきっかけにもなった。『EnglishCentral』を活用することでレベルにあった英語学習がいつでもできるので、授業が終わっても、『EnglishCentral』を使って学習を継続したいという意見が受講者から複数に寄せられた。

その一方で、FD委員会の「学生による授業評価」のアンケートの自由記載欄には、このサイトへの登録方法や活用方法がわかりにくいという意見が記載されており、学期期間中も学習記録の確認方法やその他の使用方法に関する質問が相次いだ。よくある質問内容やその回答をまとめた資料をEメールに添付したり、説明動画を追加で作成するなど、あらゆる手段で使用方法を伝えたが、全員の受講者が操作方法に慣れるまで2か月程度を要した。対面であればすぐに伝わる内容であっても、Eメールでは伝わりにくい。また、緊急事態宣言が発令されている折には、受講者同士が実際に会って操作方法を教え合うという機会がほとんどなかったことを考えると、今後も全面的なオンライン授業を継続するにあたり、初回の授業だけでも、オリエンテーションを兼ねて対面で受講者に『EnglishCentral』の操作方法の説明をするべきだと考える。

対面授業であれば、教科書の英文記事の黙読や音読練習、音声教材を使っての通訳練習を取り入れることが可能であり、ペアワークやグループワークなどを通して、受講者同士が交流しながら学ぶことができる。そして英語に対する苦手意識がある受講者も、他の受講者の助けを借りながら、学習を進めていくことができる。しかし、オンデマンド形式の、全面的なオンライン授業では、交流の機会が全く失われてしまうだけでなく、一部の受講者の英語に対する苦手意識を払拭する機会も失われるであろうと予想していた。それに

伴い、授業満足度も下がることも懸念していた。ところが、予想に反して、FD委員会の「学生による授業評価」では、肯定的な意見が複数に寄せられ、授業満足度も上がっていた。『EnglishCentral』では動画ごとに英語のレベルが記載されているので、英語の苦手な受講者は低いレベルの動画をたくさん視聴することができ、視聴した動画数で評価される。視聴した動画数が直接評価に結び付くので、ペーパーテストで点数を取るというプレッシャーから解放され、受講者のモチベーションや満足度がむしろ向上したのである。

『EnglishCentral』のスピーキング練習で導入されている発音の採点機能は、特に外国文化や国際交流、英語そのものに高い関心を持つ受講者のモチベーションを上げるきっかけになっていた。採点基準が厳しいとの意見もあったが、それでも遊び感覚で英語の音声に多く触れることができた。PCによってはマイク機能がついておらず、スピーキング練習ができない場合があるので、どれだけ練習したかを評価に反映するのは困難であるが、今後もこの機能をより多くの受講者に活用してもらいたいと考えている。

以上のように、コロナ禍においては、eラーニングシステムの導入は有効であり、その学習の到達度を授業評価に反映することで、家庭学習の習慣がつくことがわかった。また、オンライン化を進めていくことで、学習者の英語レベルにとらわれることなく、授業を進めていくことができるので学習者の苦手意識も払拭されつつあることがわかった。授業形式の工夫によっては、オンライン授業の方が受講者の授業満足度が上がることが期待できるので、今後も感染拡大の状況次第では積極的にオンライン授業を取り入れていくべきだと考える。

【注　釈】

注１）LMSとは、日本語では「学習管理システム」と訳され、CMS (Course Management System)「コース管理システム」の同義語と捉えられている。

注２）『EnglishCentral』のライセンスが付いた教科書を教員が採用し、受講者がその教科書を購入すると、一定期間『EnglishCentral』のeラーニングシステム利用する権利が与えられる。教科書の価格は2000円程度であり、一般的な大学英語教科書と同等の価格である。2019年度は、『VOA News Plus』（成美堂）を採用した。2019年10月から2020年2月までは無償提供のeラーニングのシステムのみを利用した。

注３）教科書に掲載されている記事に関する動画や『EnglishCentral』の中にある別の動画を視聴し、その中で使われている単語学習（タイピング練習）を自宅で行うことを任意の追加課題として出していた。教員が設定した目標に到達できた場合、素点10点分をテストで取得した点数に加点するという方法を取った。英語が苦手な一部の受講者の救済措置としてこの課題を出したが、実際に課題に取り組んだのは、成績上位の受講者のみであった。

【文　献】

1）井上加寿子，伊藤創，依田悠介：eラーニングを活用した英語科目における効果的な授業実践の試み，教育総合研究叢書，7，65-73，2013.

2）寺内一，山内ひさ子，野口ジュディー，他：21世紀のESP：新しいESP理論の構築と実践，pp.80-81，大修館書店，東京，2012.